

5. 「情報化（テレビ・ファミコン）と子供たち」

日本学校保健学会前会長

伊 藤 助 雄

昨年の7月、中学生が両親と祖母を刺殺する事件に、マスコミは、ファミコンソフト「ドラゴンクエストⅢ」のシチュエーションと少年の行動が一致しているので、ファミコンのシュミレーション殺人と作りあげました。

或いは昨年9月の新学期、子供たちの自殺が10人を超した。学校がその原因のひとつにまちがいないが、その根底に死に逃げ込む、死を軽視している、つまり子供たちを孤立した自閉的な世界から簡単に死を選択させたといえるか？

テレビゲームはテレビのように血は見ないが殺しあいです。映像では、音とともに、いろんな武器で、無数の命が消されてゆきます。“死ね”“死ぬ”と子供たちの口から平然とでできます。そしてゲームは、そこでは命がいくらでも交換がきいています。その「死を恐れぬ精神」が、人の生命の終末、自殺へも、平気につながってゆくような気がします。

一方、テレビは、マミーの育て方、ベビーの見方によって、良くも悪くもなる両刀の剣です。生れてすぐから、テレビの光と音、一方的な刺激を、海綿のようにしみこみやすい赤ちゃんの脳に刻印するテレビのインパクト、そのストレスは、赤ちゃんの脳の形成に影響し、それが心と体のアンバランスな発育になりはしないでしょうか。私は、これが、テレビの悪い影響の最たるものと思います。

北九州市の委託事業としてこの研究を7カ年間、19,004名に及ぶデータにもとづいて、テレビの心理面・身体面の影響を分析した研究は、大きく評価されています。

その業績は、学会・著書その他で爆発的反響をよび、私自身驚いています。

また、臨教審に引出され、数回の会議の結果、第三次答申の中で、政府の対応として「おやすみ」テロップの放映が印刷され、結局、永遠に残る記録となった次第も発表いたします。